

---

# 天使にウィンク

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使にウイंक

### 【Nコード】

N69710

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

パチンコはただの時間つぶしよ。

「いらっしやいませ、ただいま出血サービス中です」  
ジャラジャラと音が鳴り響く店内。

その中に紺のスーツに白のブラウス、黒のパンプスの若い女性。  
店員も呆れるほどの勢いで出ている。

中年女性が

「ねえ、お姉さん、すごい調子よさそうね」

リクルートの女性はちらっと見ただけでまた台に向かう。

「ホラまた入った」

思わず箱を取りに行くお人好しの中年女性、澤本清美。

「ほら、どんどん入れて」

会釈する若い女性。

でも、それほど喜んでないこの若い女性は田島苑子。

苑子は腕時計を見て立ち上がる。

「え、まだ出そうじゃないの」

その声に手を差し出してどうぞと離れる。

「そう、悪いわね」

澤本に代っても、台は景気のいい音を出していた。

今日苑子が面接するのは住宅建設会社。家に帰っても、去年再婚した父と義母の連れ子も含めての生活は耐えられない。義母は悪い人ではないけど遠慮したかった。苑子のケータイには義母がくれた天使のストラップが付いている。義母はこんな可愛いものが好きだという。

会社の前で、ちょうど同じようなリクルート風の男性に会った。  
思わず我先にと入った。大声でよろしく願いしますとハモって  
しまった。

「ほう、元気な人が来たね」

社長は白髪の恰幅のいい男性だった。

「まあ、見ての通りだから、雇うのは一人でいいんだ」  
卒業式も三日後に控え、苑子は真面目に質問に答えたが、もう一人の若者はにこやかで余裕が感じられた。苑子はいつも必死でアピールするが空回りなのだ。

冗談も交えての彼と社長とのやり取りを聞いてがっかりした。会社を出ると、さらに憂鬱な気持ちになった。後日連絡すると言われたが、きつと電話は掛かってこないだろう。

最近、苑子は父親と話したことがなかった。もう世話にはならないと言いたいのに、経済的な地盤ができない自分が惨めだった。世間まで苑子を必要ないと言ってる気がした。

電車を降りて、駅の階段を足取り重く上がっていく。すると、  
「あ、あなたのおかげで大フィーバーだったのよ」

初めは誰か分からなかったが、あの台を譲った女性だとわかった。苑子の顔を見て何かを感じたのか、

「おごるわ」

そう言うと、苑子を連れて歩きだした。苑子は見知らぬ人についていくような女ではなかったが心が疲れていた。清美の馴染の居酒屋に入ると、今までの面接での失敗もつい話してしまった。清美は何か考えているようだったが、一枚の名刺を出した。その名刺には『グッジョブ制作会社社長 澤本清美』と書かれていた。

「うちは小さな会社よ。でも、これから伸びるはずなの」  
苑子はじつと名刺と清美を見つめた。

「作ってるのはこれよ」  
バッグから出したのは天使の形をした防犯ブザーだった。

「娘の防犯ブザーが味気ないからこんなの作ったら評判が良くて」  
苑子が天使の人形のスカートから、小さなリングが出ている。それを引っ張ると店内にけたたましい音が鳴り響いた。

「ごめんなさいね」

笑いながら店長に謝る清美。店長もいつものことなのか笑いながら

「困るよ、社長。みんな帰っちゃうよ」

そう言って、枝豆入りがんもを持ってきた。

「うちは何でも作る会社」

バッグをがさごさせながら取り出したフォトアルバムには、グ  
ッジョブの製品の写真がいくつもあった。

アイデアが面白いと思った苑子は、営業よりこういう製品の企画  
がしたかった。苑子は自分のバッグの中から小さなポーチを取り出  
した。このポーチにはホックがついていて、コサージュや人形をつ  
けたりはしたりすることができる。苑子が暇なときにに作ったも  
のだった。

「これはいいわねえ。使いやすいポーチって決まってるもの」

さらに苑子は、タオルの抱き人形を作って枕にしたらどうかと話  
した。清美は苑子のアイデアに目を見張った。タオルで作れば洗え  
るし衛生的だ。

「あなた、うちで働く気はない」

入社して苑子の生活は激変した。口下手だと言ってられない。社  
長はパチンコ好きなこと以外は、極めてセンスがいいこともわかっ  
た。

大学で培ったパソコンは、思いのほか仕事に役立つた。いろんな  
園や小学校に天使の防犯ブザーをアピールした。さらにサンプルを  
園に送ると、必ずと言っていいほど注文が入った。卒園記念用にた  
くさんの園からの注文は清美を驚かせた。

出来上がった苑子の抱き人形の枕の試作品を家に送った。

ある日、煎餅を持って出張途中の父が来た。父はみんなに深く頭  
を下げていた。肝心の苑子には、

「よく入れたな」

そう言って優しく肩を叩いた。苑子は父の手のぬくもりを初めて  
温かいと感じた。

苑子は初めての給料だと封筒に少し入れて渡した。父は照れ臭そ  
うに笑っていたが、ありがとうと言って帰って行った。父に渡した

小遣いは初めての給料ではない。

パチンコで儲けた金だがこういう嘘は許される気がした。

煎餅の入った袋にはあの抱き人形の枕にキスしている笑顔の義母の写真があった。苑子は胸が熱くなり、ケータイの天使のストラップを握りしめ、盆休みには帰ろうと思った。ふと顔を上げると、抱き人形に頬ずりをしている清美が

「これ売れるわ」

と、ウインクしながらつぶやいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6971o/>

---

天使にウィンク

2010年11月6日22時25分発行